Tourenbericht 1
1953. 9. 10.

西明寮高会才一年才一号　通巻才一号
発行者　東京都中野区大和町一八〇
田中方　西明寮高会
発行責任　田中將利

NO.1

八ッ岳春山合宿

期日　四月六日～四月十日
人員　L田中將利、田中実、平沢勇
装備　ウインパー型テント一、エアマットレス三、シュラフ三
ラジウス一、アイスバイル一、ハンマー二、カラビナ
三、ロックハーケン九、すてなわ三　ザイル三十米一
石油一ガロン、コッフェル一、ピッケル、アイゼン、
ワッパ各自、スコップ一、米四升、パン三〇ケ　他

記録

〔四月六日〕　曇后雪

茅野(〇六〇六)—(〇六四五)—バス—泉野(〇七二〇～〇七五五)—美濃戸二股(一三一五)

前夜汽車の中で、すい漢と二戦したため、雪解けの単調な高原をテカイ荷で行くには苦ラク〳〵となり、その上、雪まで降りはじめ、遂に平沢がいかれてしまったので、二股にテントを張り流殿することになった。春だと云うのに夕方までに一尺余も粉雪がつもった。

〔四月七日〕　くもり時々小風雪

二股(〇八〇〇)—中ノ行者(〇九四五)—(一〇一〇)—行者小屋(一一一五)

朝雪が止みまぶしいくらいの陽光、阿弥陀の氷頂はすばらしい。ヒサまでのラッセルをしながら右股を登り中ノ行者にて昼食、Hをはけまし〳〵—左河原まで一気に登る。樹根まで雪にうもれた行者小屋の近くに我々のBCを建設する。幕営点〇十四時

BC(一四〇五)—阿中コル(一五三〇)—(一五三五)—引返点(一六一〇)—コル(一六四五)—BC(一七二〇)

直ちに阿弥陀岳に登るべくワカンをつけて右股を交代でラッセルする。深雪のため極単なアルバイトを強要され馬鹿馬鹿しい程時間を費した。コルからはアンサウンドな雪面と這松でコンクリートされたかたい雪とのミックスした約五〇度の斜面に苦であげ、日没と風雪のために頂上直下五〇米で退却した。

〔四月八日〕晴后風雪、　AM六時気温マイナス十五度

BC(〇九四五)—アイゼン着(一一一〇～一一四〇)—主陵(一二〇五)—石室(一二一五—一二五〇)—赤岳主峯(一三二五—一三三五)—赤中コル(一四三五)—中岳(一四四五)—阿中コル(一五〇〇～一五一五)—BC(一五三五)

すばらしい夜明けである。振り仰ぐ阿弥陀岳は金色に輝き、赤岳、横岳の巨人群は吹上げる雪煙に紅と燃え、日影である西麓はことごとく瑠璃色か濃紫を呈しその厳かな調和は食欲をそそるに充分であった。Hが風邪で引いているので、横岳、硫黄岳を変更し、主峯赤岳へと向う。地蔵の祈でワカンを脱し、スレイカブルな雪塊をたどって主陵に出、雪で完全にうまった石室の中にもぐり込んで昼食をとった。この頃より徐々側より吹き上げて来たがては風雪となり、我々もアイゼンを和かして頂上に向う。早々に頂上を辞したが、赤中コルへのトラバースルートが発見出来ず、風雪の晴間を待つ。中岳の登りには青氷があったりして思ず声を出したりして、左右に張り出す雪塊にキモをひやしながら、BCへ下った。

〔四月九日〕　晴

BC(〇七三〇)—取付点(〇八二五～〇八五〇)—アンザイレン

(〇九一五〜〇九三〇)—ザイルはずスノーリッチ(一〇三〇)—阿弥陀岳(一一三〇)〜一二二〇)—阿中コル(一二四五〜一二五〇)—BC(一三一二)

全員朝ゴが出そろって来たので阿弥陀岳北陵を狙って出発。右股のカールボーテンにて北陵にトラバース、取付にてアイゼンをつけ拵刷、平沢、奥の才ーダーで登高を開始、見上げる北陵は、大岩塔を氷に色どられて天空に突き出し、北西陵は北壁と共に圧倒的に切れたフェースで我々に迫る。岩陵の下のテラスにてアンザイレン。南壁上部にとって千米程登り、直再ピレイピンを一本打ち二〇米登りレッチにて七カンドがつづく、才二ピッチは岩と氷の斜面でアイスハンマーでステップを切りながら登り氷のテラスへ達す。全員此所で顔を合せた。才三ピッチは約十五米、吊り上げカサどたハーケンが残されてあった。ザイルをはずし、直接でコンクリートされたスノーリッチをステップを切って避雷、ジャンクション下の広い雪面に出る。気温があがりこの雪面が地ひびきを立てゝズズッと動いたのには全員顔面蒼白。無事山頂の雪庇を切って上に出た時は大河心の切りに間断なくナダレが落ちこした。南陵を偵察してBCまで一気に馳せ下り午后は雪洞を掘る。

〔四月十日〕 くもり后雨　AM六時気温マイナス五度

気温があがり暖い風が吹きまくっている。タリセードの練習

をすべく阿中コルへ行くが適当な所がなく中岳を越えて右股をスノーボールと共に落ちる様にして下り早々にBCを撤収、春のおとずれた高原を下り雨に追われながら宝軍の人となった。

BC(〇七〇五)—阿中コル(〇七三五〜〇七四五)—中岳(〇八〇〇)—赤中コル(〇八〇五〜〇八一〇)—BC(〇八三五〜〇九五〇)—二股(一〇五〇〜一一一五)—泉野(一三三五〜一三四〇)—バス—茅野(一四一五)

NO2 谷川岳東面

期日　五月二〜三日

人員　L　田中新利、長崎正勇　(山田昭、川口和雄)

〔五月二日〕 晴

土合(一三二〇〜一三三〇)—西黒沢(一三四五〜一四四〇)—マチガ沢出合(一五一五)

西黒沢は増水していて靴を脱いで渡渉したので大分手間どった。マチガ沢出合右岸にBCを張り、早くも雪の上に座ぶ。

〔五月三日〕 晴

BC(〇八〇〇)—二ノ沢出合(〇八四〇〜〇九二〇)—肩(一一二〇〜一二〇〇)—沖耳(一二二〇)—一ノ倉岳(一三〇五〜一三一〇)—沖耳(一三五〇)—肩(一三五五〜一四二〇)—BC(一五三五〜一七一五)—土合(一八一〇)

七時半頃山田氏がスキーをつけて来られる。八時出発、5名の所で山田氏のクリスチャニヤを頂物しニノ沢出合でアイゼンをつける。附近にデブリがゴロゴロしているのでNがマチガ本谷と思るので、それに上部に残っている巨大なブロックが気になるので、ニノ沢より西黒尾根に向ってキックステップで登る。稜線は巨大な雪庇の連続。東京では初夏だと云うのにこの白銀の世界に我を忘れる人々。肩にて昼食とし、頂上着一三時四〇分　新雪が二三寸あり、岩角はエビノシッポにかぶられている。田中のみ一ノ倉岳往復。下りはニノ沢をタリセードで下り一時間余にしてBC。BCには川口が来ていたが、食料の計算がいで食つものがなくあと三日の山行き中止してベースを撤収することにした。山田氏におごらせるつもりで迎ひかけたが間に合はなかった。

NO3 カロ一川谷川岳山(新人歓迎会)

期日　五月六日〜七日

人員　L田中將利　森沢佑治、平沢　勇、（林道、林春彦、中野英司）

〔五月九日〕　晴

氷川（三一一五）―一石山神社（三三五）オカン

〔五月十日〕　晴

一石山神社（〇六三〇）―カロー出合（〇九五〇～一〇七三〇）―杓子峯（一八〇〇）―煙突（〇八三〇）―二股（一八五〇）―大滝（〇九二〇～一〇九五〇）―一杯水（一〇三〇～一〇四〇）―塩地谷小屋（一二〇〇～一五〇〇）―川俣山

―ハトノス

前夜遅くまで花が咲き語り明してしまったので滝上巻へ入る気もなくなり、ファイターばろいであるにもかゝわらず、カロー谷へ変えてしまった。谷の中に秋雲が出来てしまっているので、面白い所はF1よりそっちまでで味気ない湖行に一回爆気がさして来たのか大滝を一服、大滝の頭数が出来る出来ないなどと話しているうちに一杯水へ来てしまった。ゆっくりと〇〇談に花が咲きハイカーにかりきって塩地谷へ集合時間丁度に間に合うとさった具合であった。新入部員合計廿五人。コンパを終って春の山におわりをつけ塩地へ下った。

NO4　丹澤ミズヒ澤（西高山岳部指導）

期日　六月六～七日

人員　田中將利、平沢　勇、中野英司　笹田英司、地現役十五名

〔六月六日〕くもり后雨

蓮沢（一七〇〇）―二股（一八三五）

二股より雨霧の上にテントを張り、西高山岳部の赤ん坊連中のためにOBが炊事をしてやる。九時頃新宿高山岳部が遅びに来てコンパ。

〔六月七日〕

夜半からの雨にぐっしょり濡れるがミズヒ沢を決行することとして出発。

二股（〇七四五）―大棚下（〇八二〇～〇八四〇）―上（〇九二〇）―陵上（一〇五〇～一一一〇）―塔田翼傾小屋（一二〇〇～一五一五）―大倉（一七二〇～一七三〇）―蓮沢（一八三五）

三ッ大棚の下でワラジのはき方から岩登りの基本を教え各班毎にわかれて行動する。雨が降っている上に面白そうな滝は一本もなく、すぐガレ沢となり赤土との苦斗二十分余にして三ノ茅のやゝ陣側に出た。烈しい雨の中を塔田小屋に走り込み、昼食をとる。二時頃浪次郎班の到着をまって大倉尾根を下る。一年の山田が心臓病のためいかれてしまい秦野小学校にあずけてもらいる。田中、笹田が残り他は帰京。山田、田中、笹田は八日夕刻帰京した。

NO5　穂高夏山合宿

期日　七月廿八日～八月八日

人員　L田中　実、中野英司、笹田英次　福田宏二郎

記録

〔七月廿八日〕晴曇時雷雨

松本（〇四二〇）―島々（〇四五九～〇五〇〇）―中湯（〇七〇三～〇七四〇）―上高地（〇七四〇～〇七五〇）―河童橋（〇八〇〇～〇八三五）―巨沢（〇九四〇～〇九五〇）―徳沢（一一〇～一二二五）―横尾（一四三〇～一六四〇）―汕沢BC（一九四五）

田中秋が不参加となったので荷は一人十二貫余となったので、バスで上高地へ入った。上高地にて朝食をとり徳沢に向う。二時頃より降り出した雨は夜に止まず、荷を半分横尾に残して出発したが福田が足をくらしたので池平より約十分程下の所にBCを張った。

〔七月廿九日〕　晴后雷雨

BC（〇六一五）―横尾（〇七五五～〇八五〇）―BC（一一一〇）

猪苗代の残余の物資をBCにポッカする。午后二時より全員五六の雪渓にてスリセード練習。今日も又雪崩になやまされ四時半ベースに帰着した。

〔七月三十日〕 晴后くもり 雷雨

BC(〇六〇〇)—五六コル(〇七〇五—〇七四〇)—五峯(〇八一〇)—三四コル(〇九一五)—(一〇〇〇)—三峯(一〇四〇)—前木(一一一〇—一一三五)—奥木(一三二〇—一二三〇)—穂高小屋(一四〇五—一四一五)—BC(一五二五)

五六の雪渓を登り北尾根にとりつく。三峯の登り口にて吾田が行きづまりサイルをくり出したりして又コルへ帰り昼食をとり出発三峯の頂上には十一時十分前木奥木を通て本谷をスリセードでBCへ下った。

〔七月三十一日〕 晴后雨

BCを居住性の良い場所に移動する。初のカレーライスに野菜の着付けとの豪華な食事に停滞の良さを味った。

〔八月一日〕

BC(〇五四〇)—北木(〇七三〇)—(〇九五五)—C沢下降—オニ尾根を稜P3、P4間(一〇五〇—一一一〇)—P1(一二一〇)—北木(一二一三—一四三〇)—BC(一五一五)

中野は北木稜線縦走。田中、吾田、福田は中野と別れオニ尾根を登るつもりでC沢を下ったがルンゼを誤りB沢を下っていたので再び北木へバック、C沢を下降し、困難になって来た所から主稜P3P4間のリッヂにトラバースして北山稜にとりついた。P1下のフェイスで県岳高のパーティと一緒になり簡単に北木の頂に立った。雨のため一時小屋へ。ヒナン一気にBCへと南稜を駆け下りた。明日からいよ〳〵現役のオモリなのでテンプラを揚げて舌づつみをうつ。

〔八月二日〕 晴時々雨

田中、吾田は穂高を経て槍岳へ現役の登山隊を收容しに登り、福田は午后穂高へ縦断準備に下った。中野キーパー。

〔八月三日〕 晴后くもり

福田帰京、吾田は上高地へ女子を迎へに駆下り、佐伯さつれて涸沢へ。田中帰って来た。田中は現役さつれて涸沢へ。逆に中野は穂高へ女子指導に下る。

〔八月四日〕 くもり時々雨

午前田中吾田以下六名スリセード練習 午后田中林以下六名スリセード練習、中野は女子さつれて蝶岳に登り又方涸沢へ来る。

〔八月五日〕 ガス

吾田以下七名北尾根、田中以下三名(女子) 北木涸沢岳縦走 ~~北ヤ~~ ~~ルンゼ~~ 北尾根、中野以下四名ジャンダルム後(住

〔八月六日〕 晴后小雨

吾田以下五名北木東稜より涸沢岳、田中以下四名ジャンダルム、中野以下五名北木稜線縦走。

〔八月七日〕 くもり后雨

BC撤收(〇九二〇)—横尾(一一二〇 ~~一二〇〇~~ ~~一三三〇~~)—徳沢(一三〇〇)

BCを撤收、屋根わるく六両となり徳沢園にとめてもらう。夜はミルクやシルコに舌づつみを打ち、個人夜の余興が出るなどして合宿最后の夜をかざった。

〔八月八日〕

徳沢(〇七一〇)—白沢渡(〇七四五—〇八〇〇)—徳本峠(〇九三〇—一〇二〇)—鍋割(一一四〇—一二二〇)—南沢出合(一三四五—一四一〇)—島々(一四六一〇)—松本(一七四五)

〔註〕 今合宿後半の詳細は別紙第十二号に発表の予定なので省略します。